柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 170 号

かわさきの郷土史を読む 10

小島一也著『麻生郷土歴史年表』・『麻生の歴史を探る』（その1）

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員　新井　悟

小島一也著『麻生郷土史年表』

今回は、小島一也氏の『麻生郷土歴史年表』をご紹介します。

小島一也氏は、1927（昭和2）年に柿生に生まれました。1948（昭和 23）年玉川工業専門学校を卒業、その後農業とともに社会教育活動に従事されます。1962（昭和 37）年には柿の実幼稚園を設立して、幼稚園長、学校法人柿の実学園理事長を歴任しました。また 1983（昭和 58）年に川崎市議会議員選挙に当選、市議会議員を4期務め、1995（平成7）年には第 31 代議長に選出されました。さらには麻生観光協会会長を務め、2002（平成 14）年には勲五等双光旭日章を受章されました。2014（平成 26）年 12 月、87 歳でご逝去されました。郷土柿生を愛し、川崎の歴史と文化の研究、発信に多大な貢献をされました。

『麻生郷土歴史年表』は、365 頁の異色の大著です。縦書きの構成で、各頁は見開きになっていて、上段に西暦（元号）、その次に郷土史の欄、その下に日本史の欄と世界史の欄があり、川崎と日本全体、世界全体の動きが、ひと目でわかる構成になっています。同書の序文に寄せられた杉本長治氏（元川崎市総合文化団体連絡会理事長）の表現を借りれば「隣接する都筑郡（柿生・岡上が属していた）や現在の川崎市、そして南多摩郡などの出来事も収録されている。私たちの暮らしは行政圏でなく生活圏で営まれている。広い視野での編纂に小島さんの歴史に対する見識の高さに、まず頭を下げざるを得ない。」構成となっています。また見開き左ページのはしにコラム欄があり、その数なんと本文だけで約 270 個。書き溜めたコラムがそれでも入りきらないので巻末にまとめられたものまで含めると、全体で約 380 個のコラムがあります。もはやコラムというより、“郷土史辞典”の趣があります。

内容紹介

とにかく一度手に取ってご覧いただきたいと思います。そうすると本書の面白さを実感されるはずです。川崎市に生まれ育った人は勿論ですが、最近住み始めた人でも、必ず興味を惹かれる事項があるはずです。たとえば麻生区の事例には、1974（昭和 49）年 6 月 1 日に「新百合丘駅が開業」とあります。新百合丘駅といえば今では麻生区の代表駅となっていますが、それまでは小田急線に乗って小田原方面に向かうと百合丘駅の次が柿生駅だったわけです。その麻生区も 1982（昭和 57）年 7 月 1 日に多摩区から分区されて誕生します。しかしまだ出来立ての駅と区で、翌年の 1983（昭和 58）年には「山口台土地区画整理事業が始まる」という記事があります。周辺の住宅地の整備はこれから進むところだったわけです。インフラ関係の記事だけではありません。1985（昭和 60）年には「黒川、炭の生産終る（市川祐さんの炭焼きカマの火が消える　四月）。」とあります。無味乾燥な年表ではありません。郷土史が中心にあることで、新しい川崎と古い川崎が交錯するさまを、自分史と重ねながら確認するという稀有な経験ができる本となっています。

多くのコラムから、いくつかタイトルを拾ってみましょう。「バラ栽培（1930）」、神奈川県の切りバラ栽培は黒川から始まったという記事。「万福寺人参（1954）」、地野菜の人参が農林大臣賞を受賞した記事。「柿生隧道取り壊し（1978）」、市内唯一のトンネル、柿生隧道が老朽化のため壊され、今の切通しの道ができた記事。「香林寺五重塔（1987）」、細山・金程の人たちが地域の先人の恩に報いる記念事業として塔を建立した記事。「尻手黒川線再着工（1998）」、市を貫く幹線道路の工事が調整難航の末、世田谷町田線までの全線着工の見通しがついた記事。いかがでしょうか。なにか興味をひく記事はあったでしょうか。そこが足がかりとなって、その当時の風景や自分に思いを馳せることができるのが本書の魅力です。

ご興味がある方のために、川崎市立図書館の蔵書をご紹介します。小島氏には多くの著作がありますが、単著でかつ郷土史に関する内容のものに絞ると、主なものは次のとおりです。『ふるさとのルーツを訪ねて』（1986）、『柿の実百話』（1995）、『麻生郷土史年表』（2009）、『麻生の歴史を探る』（2016）。『麻生郷土歴史年表』は、川崎、幸、中原、高津、宮前、多摩、麻生、柿生の各図書館に所蔵されています。貸出禁止のものもありますが、各館とも少なくとも1冊は貸出用のものがあります。『麻生の歴史を探る』は、中原、麻生、柿生の各図書館に所蔵されています。中原図書館のものは貸出禁止ですが、麻生と柿生には、貸出禁止のものと貸出用と各1冊が用意されています。なお、『ふるさとのルーツを訪ねて』と『柿の実百話』（1995）も図書館に所蔵されていますので、こちらもあわせてお薦めします。

参考文献

小島一也　1986『ふるさとのルーツを訪ねて』華沙里、1995『柿の実百話』柿の実幼稚園、
2009『麻生郷土史年表』小島一也（自費出版）、2016『麻生の歴史を探る』小島一也（自費出版）
伊藤葦天　1963『川崎風土記』 川崎新聞社

大地に刻まれた歴史探勝　7

『日本書紀』に書かれた「武蔵国造の乱」は史実なのか？

村田　文夫（日本考古学協会会員）

今回は、古墳時代後期（6世紀）の大量殺戮事件？の謎解きに挑戦です。わたしはこの事件の背景に、〝武蔵国造〟職をめぐる争乱が史実であったのではと真剣に考えています。

舞台となる第六天古墳は、白山古墳の陪塚ではなかった

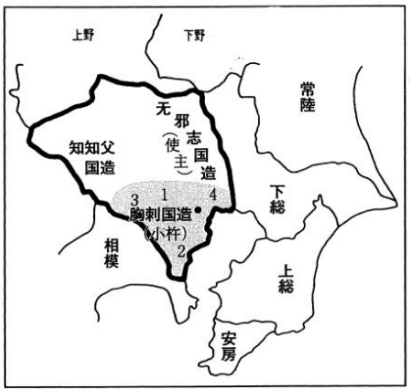
第六天古墳は、前回テーマの白山古墳に隣接する直径 20m 弱・高さ約 4m の円墳。発掘調査を実施された慶応大学は、白山古墳に関係する臣下を葬った陪塚と予測していましたが、見事に空振り。内部主体は、長さ約 8m の組合せ式石室で、白山古墳より明らかに新しかったのです。

石棺の内部からは、勾玉・切小玉・棗玉などの玉類、鈴・釧等の金属製品、鹿角製の刀子など、豊富な副葬品が発掘されましたが、この時期の古墳ではまあ普遍的。第1類遺物とします。石棺の外部からは、直刀 12 本、鉄鏃 82 本など、鉄製の武器類が多く、また石室内からは、6 世紀後半～7 世紀前半期の須恵器などが発見されました。これを第2類遺物とします。このように、石棺の内部は飾り物が主体、石棺の外部は武器類が主体で、考古学的には石棺内の第1類遺物が古期と判断できます。加えて石棺上からは、顔を伏せた状態で 11 体の遺骸が発見されました。11 体は、同時に葬った遺骸（いわゆる同時葬と判断）。加えてすべて男子で、年齢は 30～40 歳の壮年期が殆ど。 10 歳未満の少年も一人含まれていました。

このように遺物の発見状況と11体もの多数遺体群は、明らかに異様ですから、何がしかの仮説を提示して検証してみる必要があるでしょう。わたしは、なが年『日本書紀』に書かれている「武蔵国造の乱」の記述に関連しているものと推測してきました。

写真1　第六天古墳石室内
（石棺の北側部分と奥壁との間に置かれた 12 本の直刀）

「武蔵国造の乱」とは、『日本書紀』安閑天皇元年（534）に書かれている武蔵国造職（現在の県知事職）をめぐる話題です（第1図）。同族の豪族の小杵（おき）と使主（おみ）が争い、決着がつかない。形勢不利とみた使主は、地続きの上毛野（群馬県）勢と結託してヤマト政権側に裁断を求め、使主が勝利しました。使主は政権側への感謝の気持ちから、南武蔵の四屯倉（みやけ：橘花・倉樔・横淳・多氷）を献上しました。橘樹屯倉の位置は、武蔵国橘樹郡内でしょう。わたしは『日本書紀』に記載された記述は、史実に関連しているという可能性を抱いています。根拠は以下のとおり―



第1図　使主・小杵の勢力図と四屯倉及び第六天古墳の位置（関和彦 1995 に加筆）
1:橘花　2:倉樔　3:横淳　4:多氷

1・豪族たちが覇を競う時代から、国の境界を定め、ひとりの国造職に治めさせるためには、事前の準備が大変でした。『日本書紀』の崇峻天皇 2 年（589）には、東海（太平洋側）諸国の国境の記事があります。孝徳天皇の大化 2 年（646）、天武天皇の 12・13 年（683・684）にも同様の記事があり、これこそ割拠していた群雄の覇権を治めて、新しい国造りをする第一歩でした。

2・『日本書紀』には、「使主を殺さむと謀る」「小杵を誅（ころ）す」などから、何回かの交戦があり、双方に相当数の死者が生じた可能性があります。報告書には、直刀 12 本の〝刀身〟を、石棺と北壁との隙間に抜き置いています（写真1）。刀は戦闘に敗れた小杵側の兵士の直刀で、刀身を鞘に納めた状態で石室内に運ばれ、刀身は石棺と北壁との間にある狭い隙間にまとめ置いたのでしょう（ただ鞘の処理に関する記載はありません）。次いで遺骸は、報告書によると、石棺の蓋上に伏せて重ね置かれました。飛び道具である鉄鏃の 82 本は、石棺外の東側に纏めて置かれていました。鉄鏃 82 本は、大人の戦士 10 人の所持品でしょう。そうすると、大人の兵士一人あたり武器は、直刀 1 本と鉄鏃 8 本前後であったことになります。

3・多くの戦死者を自軍に運び込み、何処に埋葬する？　候補に浮かんだのが第六天古墳の横穴式石室。戦死者を運び込んだ時に、石棺の蓋は開けなかったので、石棺内の勾玉・切小玉・棗玉とか、玉類、鈴・釧等の金属製品などの第1類の副葬品類は遺されていました。

このように第六天古墳は、2 回にわたる葬儀と多数の遺体に関わる武器類の研究なくして、その本質的な研究は絶対に深まらないと断言できるでしょう。ただ武蔵国造職の乱と関連づけるのはわたし一人で、賛同者はゼロ―。 それでも、命ある限り主張し続けますよ。

シリーズ
教育の歩み 第3部

日本の学校と教育（26）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

女性の高等教育の誕生と特徴

成瀬や津田、そしてその後継者たちの並々ならぬ努力によって、日本における女子の高等教育は途切れることなく続いていったのですが、初等教育における就学率が90％を超え、尋常小学校の教育年限が4年制から6年制に延長された明治40年（1907）以降、学業途中での女子児童の中退率は、第24回に記した如く男子児童に比べはるかに高かったのです。義務教育段階での就学率の男女差が大きく改善するのは、男女平等を強くアピールした新憲法体制が定着する昭和30年代に入ってからのことでした。

学級共同体の諸問題

仲良く紙芝居に見入る子どもたち

既に記したように、日本の「学級」制は、村落共同体という村社会の枠を超えた「学級」共同体を作り出すことによって、成り立ったものでした。それは子ども組の掟に従って、縦に連なって遊ぶ子ども達に対して、教師の側が「学級」内での様々な楽しみを提供したり、「学級」間の競争意識を煽ったりすることによって、生徒たちの中に定着していったものでした。

この過程で行われた作文指導によって、教師は生徒たちの内面や家庭環境を把握することも可能だったのです。キリスト教世界に属する欧米では、教師が生徒の内面に関わる指導をすることは、稀でした。それは、信仰告白や告解という形をとっての教会の専権事項だったからです。それを日本では教師が担当したのです。ここに問題が生じます。熱心な教師ほど「良い学級」作りに熱中するあまり、「クラスの団結」や「みんな一緒に…」と集団のまとまりを強調して、生徒・児童の自己主張を抑制してしまう無意識の押し付けを行うようになってしまうからです。いわば熱心さの陥穽と言えましょう。

子どもたちの感性や意見、興味のありかは千差万別です。とてもひとつに収まりきれるものではありません。大雑把に括ったとしても、いくつかのグループに分かれるのは自然なことです。昨今では白か黒かの二項対立に収斂させようという、デジタル思考が幅をきかせていますが、白と黒との間には、いくつもの灰色があることを忘れて良いわけはありません。最低でも白と黒と灰色の三つのグループが成立してはじめて、集団は一定の安定を得るのです。熱心な教師が「クラスの団結」にこだわって、こうした生徒たちの違いの克服を目指す時、クラスの中には居場所を失う生徒が出てきます。逆に、こうした弊害を無くそうと、個性の尊重を強調しすぎると、まとまりを欠きすぎて、求心力の働かないバラバラのクラスが出来上がってしまいます。出過ぎず、引きすぎずの指導こそが要請されるゆえんがここにあります。

天皇制という枠があり、村落共同体という縛りが健在だった戦前においては、学級に適応しきれない子どもたちが出ても、子ども組という村内の逃げ場が用意されていました。しかし戦後なると、個人の内面に対する国家の介入は否定され、さらに1960年代からの高度経済成長の進展によって、村落共同体の縛りも失われてゆきます。 そのため子ども組も風化が進んで、有名無実化してしまいます。その結果、次第に行き場を失った子供たちの存在が、社会問題となるようになりました。

公園のブランコに興じる女の子たち

子どもたちが集団で群れをなして遊んでいる限り、学齢に達するとみんなが通っている学校という場に、自分も通い始めることは、ごく自然な事柄で、そこに疑問の余地はありません。しかし、テレビゲームやスマホゲームなど仮想空間での遊びが全盛を迎え、衰える気配を見せない現在では、集団行動が苦手で人と交わることに苦痛を感じる子どもたちや大人が増えています。まして教育効果を高めるために、学級に導入された規律に従い自己を抑制しなければならないとなると、それはもう苦痛以外の何物でもなくなります。こうした子どもたちを指導しなければならない教師からすると、今までは普通に通用していた言葉が通用もしないという状況に直面することになります。教師受難の時代が到来したのです。　（続く）

柿生・岡上の地域文化財

岡上（5）　岡上を支えた禅寺丸柿と養蚕―宮野家文書より

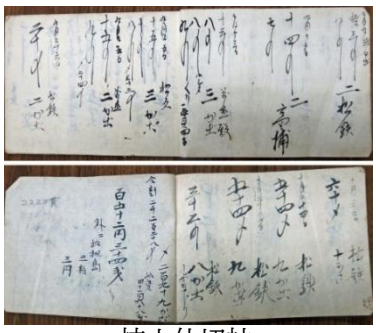
岡上に親しむ会（郷土誌会）

明治から大正、昭和前半にかけて、岡上の重要な産物として「禅寺丸柿」と「養蚕」がありました。「禅寺丸柿」は慶安の頃（1650年前後）には甘柿として江戸で評判を得、明治以降も東京・横浜の市場に出荷されました。甘柿として王座を占めた時期もありましたが、富有柿や次郎柿などの出現により、大正終わりから昭和の始めをピークに衰退していきました。

「養蚕」も江戸時代終わり頃から横浜から輸出するため盛んになり、岡上でも殆どの家で行うようになりました。文久3年（1861）には養蚕の神様を祀る蚕影山祠堂（こかげさんしどう）を勧請しています（昭和45年に生田の「日本民家園」へ移築）。戦前には、鶴見川辺りは一面桑畑だったそうです。昭和初期に最盛期を迎えましたが、昭和10年頃からの生糸相場の下落、戦争中の食糧増産により、養蚕を行う家は殆どなくなりました。

宮野家には、禅寺丸柿の出荷状況を記載した明治26年の「柿山帳」、明治38年、40年、42年、大正2年、4年、8年、10年の「柿山仕切帳」（柿は生り年があり、2年毎に出荷していた）や大正3年度、4年度、5年度、7年度の「生糸受渡控」、6年度の「生糸受渡引合帳」、10年度の「生糸場返通帳」などが残っており、明治から大正にかけての出荷状況を知ることができます。

柿山仕切帖

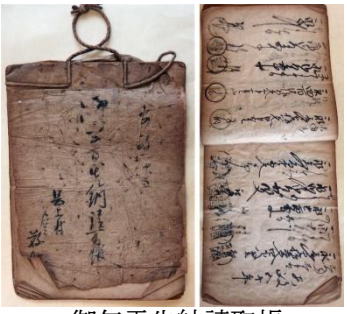

柿山仕切帖

生糸受渡控

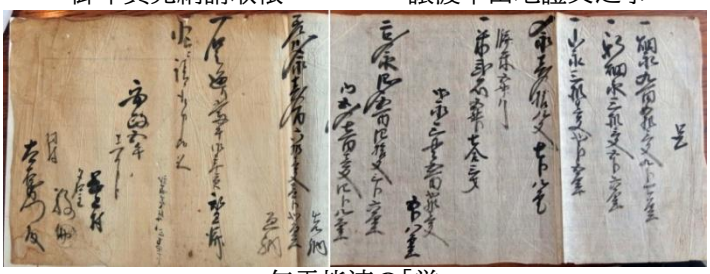
野菜や肥料の売買、日常の生活費などを細かく記載した昭和14年、15年、16年、19年、20年、21年の「家計簿」も第二次世界大戦当時の農家の生活を伺うことができる資料です。

また文化12年（1815）の「田畠石盛根取覚帳」、天保12年（1841）の「普請諸掛り並縄取帳」、安政2年（1855）の「御年貢先納請取帳」、安政5年（1858）の「譲渡申畑地證文之事」、文久元年（1861）の「譲渡申田地證文之事」、安政5年、文久3年の年貢皆済の「覚」などの江戸時代の文書も残っています。

（注）岡上の梶家文書、鳥海家文書、宮野家文書は非公開です。


御年貢先納請取帳

譲渡申田地證文之事


年貢皆済の「覚」

柿生郷土史料館催物案内　【参加自由、入場無料】

◎開　館　日：7月3・10・17・24日（奇数月毎日曜日）　　8月6・20・27日（偶数月毎土曜日）

◎開館時間：午前10時～午後3時　マスク着用の上、ご入館ください。未着用の場合は入館をお断りいたします。

第84回
カルチャーセミナー

秩父流平氏　畠山重忠と稲毛重成
～その鉄並びに杉山神社とのかかわりを追う～

日時　：7月24日（日）13時30分～15時30分
講師　：岡田誠治氏（麻生歴史の会副委員長）
会場　：柿生中学校視聴覚室（2F）
（先着 30 名　参加条件：マスク着用）

東国の鍛冶棟梁と言われる畠山重忠と稲毛重成。
一方、杉山神社の分布は秩父流平氏の勢力範囲と驚くほど重なっており、鉄とのかかわりから杉山神社解明の新たな糸口としたい。